

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

サタワル社会の人生儀礼：贈与・交換の象徴性

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5152

サタワル社会の人生儀礼——贈与・交換の象徴性

須藤 健一

一 はじめに

あらゆる社会での贈与・交換の過程には、贈る義務、受けとる義務、お返しをする義務、という三つの義務が存在することを認めたいのは、モース (Mauss, M.) である。モースは、広範な資料を駆使して贈与・交換論の基本的特性が、それら三義務にあることを『贈与論』で体系的に論じた。そして、彼はそのような義務が、どのような経済的、社会的、法的ならびに宗教的な拘束力をもって作動するかを明らかにすることにとめた「モース 一九六八・二一九—四〇〇」。モースのこの視点は、マリノウスキー (Malinowski, B.) の民族誌『西太平洋の遠洋航海者』によって触発されたものである。

モースより早く、トゥルウンヴァルト (Thurnwald, R.) やマリノウスキーは、メラネシア社会の贈与・交換の特質が「互酬性の原理」に基づいていることを強調していた [THURNWALD 1934—35: 119-41, マリノウスキー 一九六七 a: 五九—三四二]。それは、社会関係の形成、維持、強化ないし対立の解決に、互酬的な贈与・交換の行為が重要な役割をはたしていることの指摘である。贈与・交換の諸現象を互酬性の概念で把握しようとする視点は、それ以降、レヴィーストローズ (Levi-Strauss, C.)、サーリンズ (Salins, M.) をはじめ多くの研究者によってうけつがれてきている。^(注1) 同時に、互酬性の概念の性格や諸社会の贈与・交換へのその概念の適用上の問題などをめぐって議論が展開されている。^(注2)

他方、メラネシア社会における最近一〇年間の贈与・交換の調査・研究は、交換および交換対象物にみられる象徴性とその意味の解明へと関心が向けられてきている。具体的には、交換活動や交換物の性質を、男性／女性、生もの／料理されたもの、野生／栽培、食物／物質財、といった象徴的ニ項対立によって分類し、秩序づけて交換の本質

を明らかにしようというものである。ストラサーン(Strathern, M.)は、ニューギニア高地のメルパ族の編み袋の贈与・分配のしくみを分析し、女性財である編み袋が、女性の子宮と多産性を象徴している点を指摘している [STRATHERN 1972: 133-156]。シュウインマー(Schwimmer, E.)は、オロカイバ社会の交換で、ビンロウジとココヤシの交換物における男性と女性との象徴性を神話と関連づけて分析した [SCHWIMMER 1973: 161-174]。そのなかで、男性からのなまの食物に対して、女性が料理されたものを贈るることによって維持される社会関係の意味を解明している [Ibid. 111-137]。

ワイナー(Weiner, A.)は、トロブリアンド諸島の葬送儀礼の交換を分析し、女性が交換活動において男性と異なった力を操作している点に注目している。死者供養の儀礼で大量に交換される腰みのが女性の再生産能力を象徴していることから、女性が祖先の再生に関わる分野で重要な役割をはたし、母系親族集団の再統合および再編成の主役であると指摘している [WEINER 1976: 91-120]。交換における女性の重要性については、ルベル(Rubel, P.)とロスマン(Rosman, A.)も一三のニューギニア社会の交換慣行の比較をとおして明らかにしている。彼らは、それらの社会において、交換が男性の活動とみなされているが、もつとも戦略的な交換物であるブタが女性によって飼育されていることに注目している。そして、すべての社会で男性と女性の二項対立がみられ、女性は、社会の再生産とブタや主食の生産に中心的役割を演じていると結論づけている [RUBEL and ROSMAN 1978: 277-316]。

それらの研究からうかがえるように、象徴論的交換論の視点は、従来の男性中心の互酬性の概念で交換論の枠組みを規定する方法とは異なり、交換過程や交換物の性質の分析をとおして、男女の役割や交換財の象徴性の意味を追求することである。そして、交換においては、男性と女性とが対等な立場にあり、神話的世界や女性の再生産的能力などの要因を加味したうえで、男性と女性との役割が社会・宇宙論のレベルで統合されることを明らかにしている。

このような視点からの贈与・交換論は、男女の分業によって経済生活が維持されている、資源の乏しい島社会にお

ける贈与・交換の性格を把握するのに有効な分析方法になりうる。本稿では、ミクロネシアのサタワル社会の人生儀礼にみられる贈与・交換をとりあつかう。ここでは、男性の産物と女性のそれとがセットで登場し、男女間で交換される場面が多い。さらに、贈与・交換をおこなう単位が家族・親族集団のレベルにとどまらず島社会全体へと発展し、男性対女性という形での交換がなされる。したがって、本稿の目的は、贈与・交換活動における男性と女性の役割に焦点をあて、サタワル社会の贈与・交換の性格および意味を明らかにすることにある。

サタワル島は、行政上、ミクロネシア連邦ヤップ州に属す隆起サンゴ礁島である。島の面積は約一平方キロメートル、人口は四九二人（一九八〇年）である。島社会は、アイナン（*Yanang*）とよばれる八つの母系出自集団（リネツジ）より構成される。^(注3)各集団は、一人の長老の男性（酋長）によって統轄され、そのうちの三人の酋長がサタワル社会の政治的・法的統治者の地位につく。つまり、八つのリネツジは、酋長を輩出する三つの上位集団とそれに従属する五つの下位集団とに分けられている。

サタワル島の主食となる栽培植物は、タロイモ（*Colocasia* spp., *Cyrtosperma* spp.）、ココヤシ（*Cocos* spp.）とパンノキ（*Artocarpus* spp.）である。タロイモとココヤシは、周年、収穫が可能であるが、パンノキは、三月〜八月が結実期にあたる。そのため、サタワル社会の食生活は、パンノキの実がなる時期に豊富な食糧資源に恵まれるが、あとの半年間が食料の欠乏期となる。そして漁業資源に関しても、パンノキの結実期には、北東の貿易風が弱まり、漁撈活動によって多くの漁獲をみこめる。それにたいし九月から翌年の二月にかけては、海の荒れる日が多く漁撈活動も制約される。このようにサタワルの人びとは、一年のうち半年の間豊かな食生活をおくることができるが、残りの月日をタロイモに依存する貧しい食料事情のもとで生活しなければならない。この食料の欠乏期には、酋長の指令で陸上の食料資源の利用が人為的に規制される。具体的には、ココヤシおよびタロイモの収穫を一週間に二日〜三日に限定し、資源の枯渇化を防止する方法がとられる。

サタワル社会における周期的な飽食の時期と極端な節食の時期という食料事情は、食料資源を大規模に消費する人生儀礼の実行にも影響をおよぼす。つまり、大量の食料の贈与・交換がともなう伝統的航海術の修得儀礼、婚姻儀礼や死者の追悼儀礼などは、いずれもパンノキの実の結実期におこなわれる。このような限定された資源環境のもとでの贈与・交換は、資源の蓄積と再分配という要因と密接に関連していることが予想される。したがって、本稿では贈与・交換活動における男女の役割および交換対象物の象徴性の把握とやらんで、贈与・交換と資源利用との問題にも言及する予定である。

なお、本稿の基礎資料は、昭和五三、五四年度文部省科学研究費補助金(海外学術調査)の交付をうけ、のべ二カ月にわたるサタワル島での実地調査で収集されたものである。

二 人生儀礼と贈与・交換

サタワル社会で、一人の人間が一生の節目ごとにひとつの社会的地位から別の地位への移行を示す儀礼がおこなわれる機会は、誕生、初潮(女性)、航海術修得(男性)、結婚および死である。この社会の通過儀礼で興味ぶかいのは、子どもから大人への変化を象徴的に表現する成人式が、女性に限られる点である。女性の場合、初月経があると少女は、それまでつけていた腰みを脱ぎ、ある期間、特定の場所に隔離される形で初潮儀礼がもよおされる。しかし、男性の場合、女性におけるような内容と手続きに基づく儀礼は存在しない。男子は、「島の男」として必要な生産技術(ココヤシやパンノキの管理・収穫、ココヤシ・ロープの製作、漁撈活動など)を一応、体得した段階で、大人の仲間入りをするか否かが判断される。彼の父親や母方のオジがその度合を確認したうえで、酋長に申し出る。酋長が、その件を男たちの集会の場で告げることによって、男子は「一人前の男」になったことが社会的に承認されることになる。

その年齢は、日本およびアメリカの教育制度が導入される以前では、一五〜一六歳が目安とされたが、現在では、一八〜二〇歳となっている。

大人の社会的承認をうけてから、男性は、島の共同労働への参加の義務を負うだけでなく、日常的行動においても、女性キョウダイとのあいだに諸々の忌避事項が課せられる。たとえば、彼女たちと同じ家で寝ることが禁じられ、カヌー小屋を寝所としなければならぬし、同じ皿や鍋のものを食べることが禁じられる。とにかく男性にとつては、子どもから大人への移行期に通常の状態からの分離ないし離脱という儀礼的な過程がともなわず、その移行が個人々の諸技術の熟達度によって決められるのである。

他方で、男性が島の男として大人の仲間にはいるには、もう一つの責務が課せられる。それが、大型帆走カヌーを操つて他島へ航海したり、無人島へ漁撈活動に出かけたりするために必須となる伝統的航海術の知識を身につけることである。その知識の修得は、島の男子のすべてに期待される事項であり、避けることができない性質のものである。航海者としての認定をうけるまでには、専門的知識の伝授が七〜八年も続く。最初は、父親や母方オジなどについて諸知識を覚えてゆくが、ある段階に達すると、公的な「認定試験」をうける必要がある、これを通過したもののだけが「一人前の航海者」とみなされる。この「試験」の開始が、ポ (Po) とよばれる航海術修得儀礼である。ポは、四日四晩カヌー小屋でおこなわれる。私的な伝授過程をすませた新入会者は、島でもっとも偉大な航海者と目されている長老とカヌー小屋で寝起きして、知識内容をチェックされる。この場には、婦女子の立ち入りが禁じられる。

このような航海術の修得儀礼は、通過儀礼の観点からみれば、特殊的知識の授受という性格がつよく、成人式そのものにはあたらないが、反面、島の人びとから「一人前の男」としての存在に関わる評価があたえられているので、ここでは、通過儀礼のカテゴリーに含むことにする。本節では、それをもくわえ、誕生から死にいたる人生儀礼の諸過程でみられる贈与・交換の諸相を述べ、その特徴的側面を指摘する。

1 誕生儀礼

女性が子どもを産むと、酋長の指示のもとに島のすべて男たちは魚とりに出かけ、その漁獲物を産婦に贈る。これは、ロウ (row) (wouh) とよばれ、四日間おこなわれる。とった魚のなかで大きなものや「おいしい」とされるものが、産婦に優先的に贈られる「秋道 一九八一・九二」。この期間は、それまで禁漁区とされていた漁場が開放され、また禁止されていた漁法も許される。男たちは競って海に出かけ、潜水による突き刺し漁、追いこみ漁、カヌーからの底釣り漁などで多くの魚をとる。漁獲物は、個人が所属するカヌー小屋に集積され、酋長の指揮でその一部が産婦の家に届けられる。贈られる魚の総数は、一日平均、二〇匹程度である。

産婦の家では、魚の贈与にたいして料理した食べもののお返しをする。この調理には、産婦のリネツジの女性をはじめ、産婦の父や彼女の夫のリネツジの女たちも参加する。彼女たちは、ロウがおこなわれる日の早朝にタロイモ田へ行き、タロイモを掘り起こして一籠ずつ、産婦の炊事小屋へ運び、そこで共同で料理づくりをする。一日に掘られるタロイモの数量は、産婦の父や夫のリネツジから贈られるものをくわえると一〇籠にもなる。このさいに料理されるものは、オト (woto) とよばれるタロイモ (*Colocasia spp.*) が優先的に使用されるが、パンノキの結実期には、その実も利用される。いずれも、直径一メートルもある鍋で煮られるか、地炉の焼石の上で焼かれ、さらに石杵で搗かれたペースト状の食べものである。このようにして料理された大量の食べものは、洗面器などの容器に盛られ、魚を贈ったカヌー小屋ごとに配られる。このロウの期間、特定の海域へ出漁する男たちは、朝、コブラ以外の食事をするところが禁じられているため、午後三時ごろに帰漁するときには、空腹のきわみにある。男たちは自分たちがとった魚を数匹ずつ分けまえとしてもらい、カヌー小屋の周辺で焼いて産婦の家から贈られた料理といっしょに食べる。それまで禁漁区であった海域で漁撈活動をしたあと、男たちがカヌー小屋で食事することをアフィーノ (yafine) とす。

この場には漁に出なかつた老人(男性)たちも招かれ、カヌー小屋で男たちの共食がもよおされる。そして新産婦に贈り、アフィーノで食べる魚の残りは、すべて島の人びと全員に均等分配される。その分配方法は、最初、女性の名前をよびあげながら一匹ずつ配り、余分があれば、子ども、男の順で分けられる。

このロウという慣行は、「新産婦から母乳が多く出る」ことを目的としているが、同時に島の人びとが魚を豊富に食べられることを保証しているのである。つまり、酋長の管理のもとに、貯えられてきた漁業資源を一度に解放し、消費するときでもある。他方、このさいには、産婦のリネツジや彼女の父および夫のリネツジからも大量のタロイモないしパンノキの実が集積され消費される。それらのリネツジの女たちは、ロウのために七く八カ月前からタロイモ田に一定量のイモを確保するための準備をはじめ。具体的には、彼女たちは、ロウに必要なタロイモの数量を見こして、植えつけやすすでに植わっているものの除草、畝あげなどの手入れを入念にする。それは、この四日間で調理されるタロイモの数量が、通常の食糧に消費されるその数倍にもものぼるからである。

このように、新生児の誕生祝いの機会に実施される贈与・交換は、島の資源を一度に大量に消費するときでもあり、またの単位が家族やリネツジにとどまらず、島の男と女とのあいだで、魚とタロイモ(パンノキの実)がやりとりされるときでもある。そして母系社会にもかかわらず、島の男と女とのあいだで、魚とタロイモ(パンノキの実)がやりとりされるときでもある。そして母系社会にもかかわらず、新生児の父や母の父のリネツジなど父方親族集団が、タロイモないしパンノキの食糧資源の贈与に大きく貢献している点が注目される。

2 初潮儀礼

女の子が初月経をむかえると、それまでの衣服であつたココヤシの葉で編まれた腰みのを外し、新しい腰布を身につける。そして身体には、黄色いウコンの粉末を塗りたくる。腰布は、バナナやハイビスカスの内皮を繊維とし、地で織られた幅五〇センチメートル、長さ一・五メートルの織物である。これを織る技術は、すべての女子が初潮を

経験するまでに修得しなければならぬとされている。つまり、サタワル社会で「一人前の女」であることは、腰布を織る技術を身につけることが不可欠の事項であり、腰布を腰に巻くことが、そのあかしとなっているのである。また、初潮をむかえた女の子にウコンを塗るのは、そうすることによつて悪霊から身を守ることができるといふ信仰に基づくものである。

キリスト教の受容前までは、^(注5)新しい腰布をつけ、ウコンで飾つた初潮の女の子は、一人の女につきそわれて月経小屋に入り、そこで五日五晩を過ごした。そのあいだは、つき人が食事や身のまわりの世話をしてくれるので、彼女は一日に三度の水浴びをするほかは、小屋のなかで横になっているだけである。そして六日目の早朝、月経小屋から出るときに、村との境界で彼女の首にココヤシの新芽をまきつける儀礼がもよおされる。そのとき、早く食物をつくれるようにとか、良い夫にめぐまれるようにとの呪文が唱えられる。

この初潮儀礼の機会には、彼女と彼女の父のリネツジの女たちから、腰布が贈られる。彼女は、それらのなかから気に入つたものを選んで身につけ、月経小屋へ向かう。そして、つきそいの人は、かならず父の女性キョウダイがその役をひきうけるし、月経小屋での食糧も父のリネツジが支給する。現在では、月経小屋での儀礼は実施されていないが、腰布の贈とおよび、初潮のあつた数日間、女の子に彼女の父のリネツジから料理された食べものが贈られている〔須藤 一九八六〕。

3 航海術修得儀礼

サタワル社会では、男の子が一四〜一五歳になると伝統的航海術のてほどぎが始められる。最初の段階は、航海者の地位にある父親や母方のオジから諸知識を習うという私的伝授の形をとる。この期間は、七〜八年も続き、「一人前の男」の社会的承認をえたあとでも若者は、航海者のもとへ通う。航海者を近親者にもつ男子の場合は、自分でとつ

た魚やヤシ酒(注6)を持参するだけで知識を習うことができる。しかし、親族関係のない長老から航海術を修得する場合には、それらのほかに腰布や手斧などの品物を贈らなければならない。この私的伝授は、航海術の授伝者の好意に依存する性格が強く、知識の修得を志す若者は、長老の意にそうべく、物資の贈与をすることが義務づけられている。若者の資質にもよるが、ふつう伝授される知識内容の程度は、贈与物の多寡によつてきまるともいわれる。いずれにせよ、このような形態での私的伝授の結果、若者が伝統的航海術に不可欠な知識をひととおり修得したとなると、航海者の仲間入りをするための段階へと進む。

航海術見習いの若者の親たちは、私的伝授を終了した件を會長に伝え、公的な航海術認定の機会を設定してもらう。會長は、島にいるもつとも偉大で正統な航海術の継承者である長老か、ないしは他島から来たその資格を保有している航海者に依頼して、航海術修得儀礼をもよおす日を決める。この修得儀礼がポである。ポは、儀礼を指すと同時に航海術修得者をも意味する。この儀礼は、二〜三年に一度の割合で開催され、パンノキが実をつける時期におこなわれる。

儀礼が実施される前日から、島の男女は準備にとりかかる。男たちは森から薪を集め、夕方に追い込み漁で多くの魚をとる。女たちは、タロイモ田に出かけてオトイモを掘り起こし海岸から小石を運ぶ。そして、儀礼の当日、早朝から石蒸し料理づくりが始まる。男たちは、一つの地炉を掘り魚の石蒸しを分担する。女たちは海岸に二カ所、大きな石蒸しをつくり、大量のイモを調理する。午後はその石蒸しを掘り返して、イモをとり出し、石杵でつく。できあがったイモは、大型の木鉢につめられる。長径一メートル、短径五〇センチメートル、深さ七〇センチメートルもある木鉢に盛りあげられたタロイモ料理はパンノキやバナナの葉でおおわれ、儀礼場となるカヌー小屋の中央に置かれる。その木鉢の周囲には、さらにタロイモや魚をのせた木皿が二〇あまりも並べられる。そしてカヌー小屋のひさしには、儀礼で飲まれる若いココヤシがつるされる。

このようにして儀礼用の食べものが用意される夕方、航海者の地位にある男たちと新入会者は、カヌー小屋に集まる。木皿に盛られた料理の共食で儀礼が始まる。女や子どもたちは、カヌー小屋への立ち入りが禁止され、儀礼食としてもりつけられた残りのタロイモや魚の料理を分配して、各家で食事をする。カヌー小屋の中央に置かれた木鉢の料理は、それから四日間続けられる儀礼用の食べものとなる。その儀礼の内容は、航海術の公的認定者である長老(師匠)が新入会者に航海術の諸知識を試問することである。その場には、すでに航海者と認められている男たちも参加し、新入会者がまちがった答えをするとのしつたり、押揃したりする。洋上での航海中の情景を想定し、不眠不休で師匠からの特訓が続けられる。

ポの儀礼は、形式的には四日四晩で終了するが、そのあとも師匠と新入会者がカヌー小屋で寝起きして航海術の伝授が続行される。その期間は、数カ月におよぶことがある。このカヌー小屋での試練がすむと、新入会者は、伝統的航海術の修得者(ポ)とみなされる。陸上での特訓をおえた修得者は、真の航海者になるために、洋上での実地試験を試みなければならない。彼は、体得した知識に基づいて一〇〇キロメートル離れた無人島への往復航海に挑む。そして、自分の指揮のもとにこの航海を成功させて、はじめてパニュー(panuw)とよばれる「一人前の航海者」と認められるのである。

四日四晩にわたる儀礼およびそれにひき続く数カ月もの航海術の公的伝授、認定の役をひきうける師匠には、お礼として品物が贈与される。それは腰布で、儀礼の期間中、木鉢の横に積み上げられる。その数量は、三〇〇〜四〇〇枚にもほる。師匠に贈られる腰布は、コウニポ(kounippo)とよばれ、「航海術への献納」の意味である。この儀礼をうける新入会者の数は、一回平均四人程度である。そのため新入会者を輩出するリネツジは、師匠へ贈る腰布を一〇〇枚以上も供出することが義務づけられる。そのさい、若者の父のリネツジでも、三〇枚以上の腰布を贈る。また、新入会者をだしていないリネツジからも、各家一枚ずつの腰布を贈与する。

以上でみてきたように、航海術修得儀礼で消費される食物および献納される品物の数量はほう大なものである。それらの供与は、儀礼に直接関与しないリネツジからもなされている。タロイモの供出量は、酋長の指示で島のすべての家から一ないし二籠と決められる。また、石蒸しにされる魚も島の男たち総出の漁撈活動によるし、若いココヤシも男一人あたりいくつというように決定される。腰布についても前述したとおりである。ここで注目されるのは、一人の若者を航海者として認定する儀礼が、彼の帰属するリネツジのことからにとどまらず、島社会全体の問題へと発展する点である。

ポが島のすべての人びとの関心事であるという点に関して、二つの点が指摘できる。一つには、島の男がかならずこの儀礼をうけなければならないという規範と関連しており、二つには、島の資源の利用と分配の慣行に結びついている。前者については、どのリネツジでも男子がいるかぎり、いつかは当事者になるわけで、そのさいの援助を期待して、該当者がいない儀礼の機会においても、ツプン・モゴ・メ・ピシャック (*tupunwongo me pishak*) 「食物と品物による貢献」をするという考えに基づいている。このツプということは、他人が家の屋根替えをするさいに屋根材を贈って手伝い、自分のときにお返しをもらう慣行にも使用される。その意味内容は、同量・同質の物資および労働力のやりとりにある。したがって、各リネツジがポの儀礼に食物と腰布を供出するのは、長期的にみれば、均衡のとれた互酬性が維持されることになる。

後者に関しては、一人前の航海者(パニニュー)は、無人島や他島への航海でえた食料や物資を、島の人びとに分け与えなければならぬという観念と関連している。その理由として、長老は、ポの儀礼のときに、島の人びとが食べものと腰布を出してやったからと説明している。そして、人びとも、無人島で捕獲した魚介類は、モゴニ・ファヌ(*mwon-goniantu*) 「島の食物」として、他島への航海でもちかえった物は、アピサニワ(*apisaniwaa*) 「航海者のみやげ」として、それぞれが分配されることを当然のことと考えている。無人島の資源は、酋長の監督下におかれていることも作

用し、そこから持ちかえった食料は、すべて均等に分配される。しかし他島からのみやげは、航海者が交換でえた物資や贈与されたものすべてを含むのではなく、たばこや干し魚などの品物に限られる。このような島の人びとと航海者との贈与・交換の関係は、航海術修得儀礼のさいになされる「食物と品物による貢献」によって規定されていることがうかがえる。つまり、島の人びとは、ポの儀礼において一枚の腰布を贈与することで、将来、航海者が島の外から獲得するであろう物資の一部を、そのお返しとして受けとる権利を確保するのである。

以上でみたように、航海術修得儀礼においては、二種類の贈与財がもちいられる。一つは、儀礼食としての魚、ココヤシとタロイモの石蒸し料理である。そして魚とココヤシは、男たちから提供され、タロイモは、女たちからの贈りものである。もう一つは、航海術を公的に伝授し、認定する師匠への贈与物で、これには女たちが製作する腰布があてられる。それらの島の人びとからの贈与に対して、儀礼を経て、航海者の資格を獲得した若者は、生涯にわたって、航海によってえたものを返済してゆく義務をおうことになる。なお、航海術修得儀礼は、一九四九年に三人の航海者を出して以来、中止されている。

4 婚姻儀礼

現在、サタワル社会での男女の交際は、双方が成人に達すれば、性交渉も含め比較的自由におこなわれている。ただし、つき合う異性は、父方、母方の第一、第二イトコおよび同一リネツジの成員外という規制がはたらく。交際中、男性は女性の気をひくために、ウコンやベツ甲製の腰帯などを贈る。これは、ムワル(mwar)「秘密の贈りもの」とよばれ、男性が他の島へ行って持ちかえったものである。そして、二人の結婚の意志が確定すると、それぞれの親および母方のオジへ報告し婚約が成立する。婚約は、男性側の母方のオジないしオバが女性側の親に話して承認をうる程度のものである。婚約後、男性は、若いココヤシや魚を女性のもとへ贈るほかは、婚資に相当する財貨を贈与する慣

習はない。この形態が二〜三カ月続くと、男性は女性の家にひき移ることになる。

男性は新しい禪を身につけ、花飾りを頭にのせるくらいなもので特別に着飾ることもなく、母方のオジ夫婦につきそわれて女性の家へ向かう。嫁の両親は、娘夫婦が寝る家を用意し、その日から若夫婦の生活が始まる。花婿は、寝ござや掛布、小刀や手斧、漁具類および身のまわり品を新居に運ぶ。以後は、花嫁の両親、彼女の母の姉妹夫婦などと一緒に、彼女のリネツジのココヤシ林の手入れ、彼女のリネツジのための食料獲得の仕事に従事する。そして、定期船で巡回牧師が来島したときに教会で結婚式をあげて、はじめて二人の結婚が承認される。

キリスト教への改宗以前の結婚は、婿方と嫁方とのあいだで食べものの交換が婚姻の成立を表現していた。まず、婿が嫁の家に移り住む日に、婿方から食べものが贈られる。婿のリネツジでは、その日の朝から食べものづくりにとりかかる。男たちは漁に出て魚やタコをとり、女たちは、通常より入念にタロイモを料理する。夕方に、婿のリネツジに居住する人のすべてが、一人一皿の食べものを手にして嫁の家へ出かける。贈られる料理は、五〇皿にもなる。

嫁のリネツジの住人は、それを待ちうけて皿を奪い取るようなしぐさをする。それらの皿は、嫁のリネツジの住人や全成員に分配される。皿に盛られたご馳走の贈与は、アウトノパイ (awutonopay) 「手の中味」とよばれる。その翌日には、嫁方のリネツジの住人は、贈られた皿に同様な食べものをつめて婿方にお返しする。これは、アウトポ (awutape) 「からのものを満たす」とよばれる。婿方、嫁方から、日を違えて贈られる食べものは、それぞれのリネツジの住人によって、別々に食べられるだけで、双方が一堂に会して共食することはない。

サタワル社会の伝統的な婚姻儀礼が、婿方と嫁方との同量、同質の食物交換で代表され、それ以外に複雑な儀礼過程および財貨の交換をへないことは注目される。婚資を含め、婚姻成立の過程で特定の交換財が贈与・交換されないことは、母系制でかつ妻方居住様式をとるこの社会の特徴とみなすことができよう。従来の婚姻および婚資に関する研究成果によると、婚資の意味は、集団間で女性を「交換」する場合に、女性の労働力および「生殖能力」に対する

代償であるとする見方がなされている [COMAROFF 1980; NAGASHIMA 1981: 67] 「メア 一九七九」。その点からすれば、サタワル社会では、集団間での男性の「交換」であり、女性のそれとは性格を異にするし、また、婚姻後の男性の地位が問題になってくる。それらに関する検討は、次節でおこなうことにする。

5 死をめぐる儀礼

死をめぐる贈与・交換は、死者への弔問、死体の埋葬、供養といった一連の過程でおこなわれる。サタワル社会においては、それらの機会にとらず、病人が出たときにも、大規模な贈与・交換がみられる。ここでは、死につらなる病氣見舞いの慣行から、死後の供養にいたるまでの諸過程で実施される贈与・交換の諸相をあつかうことにする。

(1) 病氣見舞い

病氣が悪化し、病人の死期が近づくと、病人のリネツジの成員はもちろんのこと、病人の配偶者、その父のリネツジの成員、および病人のリネツジから婚出したアフアクル (Yafaku) とよばれる男性成員の子どもたちが、つきつきりで看病にあたる。他島へ婚出した病人のリネツジ成員も、カヌーや定期船でかけつける。これら多くの親族関係者が、添い寝をするために、病人はカヌー小屋に移される。病人の出たりリネツジでは見舞い客に食事を支給するために、大量の食糧と労力が費やされる。それを補う目的で前述した関係者は、ココヤシや食物を持ち寄る。この贈りものはアンモナル (Yammonar) 「病人の食べたいものを探す」とよばれる。男たちは魚とりに出かけたり、見舞い人に飲ませるココヤシを持参する。とくにアフアクルは、二度、三度とココヤシを贈るなど、大きな役割をはたす。女たちは、食事づくりに専念する。配偶者のリネツジや病人の父のリネツジの女たちは、料理された食べものを毎日のように、病人のもとへ届ける。

病氣見舞いで消費される食料を援助するため、酋長は島の男たちを何組かに分け、若いココヤシと成熟したココヤシを一回ずつ違う日に提供するように指示する。それらの個数は、それぞれ四個である。この贈りものは、エマーム (yemawamu) 「見舞いの品物」とよばれる。それにたいし病人のリネツジでは、パウンナリキリキ (payunahikiriki) 「見舞いのお礼」として、タロイモ料理などの食べもののお返しをする。現在では、それが紙巻きタバコになっており、その数量は、一人あたり一〇本程度である。お返し品の集積には、病人リネツジから婚出した男性の子どもたちが貢献する。このように、病人が出た場合の贈与で特徴的な点は、見舞いの品物として贈られるものが、ココヤシと料理されたタロイモ料理などの食べものであり、それらにたいし、病人のリネツジから料理された食べものないしタバコがお礼として返されていることである。そして病人のリネツジでは、見舞人の食事のために、タロイモやパンノキの結実期にはその実を消費する。見舞いに集まる親族関係にある女たちは、日中、自分の家での仕事をし、夕方一皿の料理された食べものを持参して、病人のそばで夜をすごすのが習慣である。つまり、病人への見舞いの品物には、生のタロイモやパンノキの実は使用されない。これは、病人が「食べたい」ものをすぐに食べられるようにとの、見舞人の気持の表現であると説明されている。

(2) 死および埋葬

病人が息をひきとると、看病にあたっていた女性は死体にとりすがって泣く。この泣き声で島の人びとは死者の出たことを知る。女たちは、手に新しい腰布を持つて弔問に集まる。この腰布は死体をつつむもので、アツクツク (yatu-kutuku) とよばれる。前述した親族関係者からは、一〇枚以上の腰布が贈られるが、非親族関係者のリネツジからも数枚ずつ届けられる (図1参照)。死者は、ごく近親者の女たちによって身体を洗われ、全身にウコン粉が塗られ、新しい腰布がつけられる。そして頭髮が切り整えられた死体は、腰布の上に頭を西向きにしてあおむけに横たえられる。

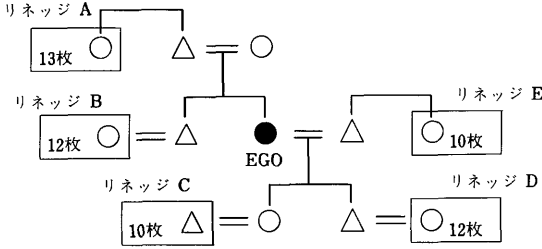


図1 埋葬儀礼の腰布の贈与

- 注1) EGO は、1979年10月に82歳で死亡。
 注2) 使用された腰布の総数は99枚。EGOのリネッジでは、36枚を用意した。

その晩は、島の女たちが交替で夜どおし挽歌を歌い、通夜となる。翌朝から埋葬の準備にかかる。墓地の穴掘り、棺づくりは男性の仕事となる。女性は死者の死装束を整えたり、食事の用意をする。棺ができあがると、島の人びとから贈られた腰布を三〇枚も棺のなかに敷きつめ、その上に死体を安置し、さらに四〇〜五〇枚もの腰布で上部をおおう。死体を腰布で包んだあと、ヤシロープで死体を縛り、棺のふたをしめ、教会での礼拝をうける。それから、墓地に運び土葬にする。このとき、死者が生前に使用していた食器、衣類、容器類も一緒に埋葬する。

埋葬には、島の人びと全員が参加する。埋葬が終わると、死者を出したリネッジから、参列者全員に、食べものないしタバコが贈られる。現在では、墓場でタバコが成人男女に均等に配られる。その総数量は、二〇本入りの紙巻きタバコが三〇〇個見当で、それらの値段は二〇〇ドルに相当する。埋葬後におこなわれる贈与は、病氣見舞いにたいすお返しと同様、パウンナリキリキとよばれる。タバコの大部分は、病人を看病した親族関係者から提供される。キリスト教を受容する以前にはタロイモ料理がお礼として、島の人びと全員に配られていた。それに消費されるタロイモの数量はぼう大で、病人見舞いの人びとに支給する量も合わせると、死者を出したリネッジが保有するイモ田のタロイモの総量の三分の一ほどが掘り起こされたといわれる。埋葬のときに、島の人びとにタバコないし食べものが贈られるのは、棺づくりや穴掘りなどの男性の仕事にたいすお礼であり、腰布を贈与してくれた女性へのお返しを意味している。棺づくりや穴掘りなどの仕事の分担は、酋長の指示のもとに決定される。

(3) 弔いあげ

埋葬がすむと、死者のリネツジ成員や近親者は、墓所ないし死者の住んでいた家で、四日四晩を過ごし、死者の霊を弔う。死者が酋長リネツジの成員の場合は、その期間、島の人びとはエヒヌ・エガン(yepinuyangang)「労働の禁忌」を守らなければならない。禁忌の対象となる労働は、男性にとつては、カヌーや家の建造のために木を伐り倒したり、屋根を葺いたり、ヤシ縄をつくったりすることなどである。女にとつては、腰布織りやマット編みなどの仕事である。酋長リネツジの成員の死の場合でなくても、死者を出したりリネツジの成員は、この禁忌を四晩のあいだ遵守しなければならない。

漁撈活動やタロイモ掘りなどの食糧獲得にかかわる仕事は、労働の禁忌の対象にはならない。埋葬の翌日、島の男たちは、若いココヤシを一〇個ずつ採取してカヌー小屋に集まる。そのなかから、四〇人分のヤシは、島の女たちに均等に分配するために残される。あとのヤシは、すべて死者のリネツジに贈られる。この贈与は、パイ・ムアーン(paymwān)「男の手」とよばれる。その翌日、こんどは女たちがタロイモ田に出てイモを掘り、食べものを料理して、一人一皿ずつ死者のあつた家へ持参する。これは、パイ・ロープット(payrhoopwut)「女の手」とよばれる。この食べものは、リネツジの年長の女性が島の各リネツジに分配し、残ったものを自分たちのものにする。

死者の埋葬後、四晩が過ぎて五日目の早朝死者の家のそばでさかんに火が焚かれる。これは、フィラオラオ(hiraora)「死者の座っていたところのものを焼く」とよばれる。焼かれるものは、死者が生前に常時使用していたもので、ココヤシやパンダナスの葉製マット、手埴籠、ときには家までも含まれる。また、死者が植えたタロイモも全部引き抜かれ、食べられるものは食用にし、残りはタロイモ田の畝で焼かれる。死者が男性の場合は、下刈りしたヤシ林の草なども焼却される。

このフィラオラオがすむと、死者の出たりリネツジの長老は、特定のヤシ林の周囲のヤシの木にヤシの葉を結ぶ。そ

れは、プアイニユ (pwayni) 「ヤシの木の禁忌」とよばれ、そのヤシ林への管理者以外の立ち入りの禁止を意味する。この対象となるヤシ林は、死者を出した家の成員が保有するヤシ林のなかで、広い面積があり、手入れのゆきとどいている土地である。この土地を管理する人びと（死者の息子や娘の夫）は、ここに入つて下刈りをしたり、落ちたココヤシを一カ所に集積することを許されるが、その実をとり出して使用することを禁じられる。禁忌の期間は五、六カ月も続き、ココヤシが相当蓄積されたときに解除される。プアイニユの開始や解除のさいには、特別な儀礼がもよおされた。死者を出したりネツジの成員は、生のオトイモ、若いココヤシをリネツジの祖霊を祭祀している小祀に四日間捧げる。それがすむとリネツジ成員は、直会に相当する共同飲食をおこなう。^(注3)

この禁忌および禁忌の前後におこなわれる儀礼の意味について、人びとは二つの理由をあげている。一つは死者にたいする「淋しい気持」の表現であり、もう一つは葬送儀礼で消費したココヤシを「もともどす」ためとの説明である。前者の理由は、祖霊の小祀への供物と直会という儀礼の内容からして、死者の霊を弔うことを目的としていることがあきらかである。この種の慣行は、サタワル島に近接するヤップ、トラック、モートロックの諸社会からも報告されている。

ヤップ社会では、ココヤシ採取の禁が解かれると親族関係者のあいだで、ココヤシ、ヤムイモ、石貨、貝貨などを交換する儀礼が盛大にもよおされる「牛島 一九七六・九〇—一九七」。また、モートロック社会でも異なつた島に居住するクラン成員間で、ココヤシ、タロイモ、魚などの交換が実施される[NASON 1971: 126-127]。それらの社会でのココヤシにたいする禁忌の意味は、死者の霊を追悼することにある。サタワル社会でのプアイニユの解除期には、直会がもよおされるだけで、ココヤシの交換がおこなわれぬ。しかし、その意味が死者の霊を弔うことにある点で、ほかの二社会と共通している。この禁忌が葬送儀礼で「浪費」した食料資源を回復する目的でおこなわれることは、資源の乏しい島社会において、経済的には合理的な手段といえよう。いずれにせよ、埋葬後の一連の贈与・交換におい

て、注目されるのは、男性の贈与するココヤシおよび女性の食物が、死者を出したりリネツジに集積されるだけでなく、島の人びとに再分配される点である。とくに埋葬の翌日、男たちによって集められたココヤシの一部が、島の女たちに優先的に分配される慣行は、葬送儀礼で彼女たちのはたす役割の重要性をあらわしていると解釈できる。

(4) 曾長リネツジ成員の死

サタワル社会には、島の曾長を輩出するリネツジが三つあり、それらの成員が死んだ場合、埋葬後、数カ月を経てから、大量のタロイモを集積し分配する儀礼がもよおされる。これは、フアリツク (FARITUKU) とよばれ、曾長の指示のもとに実施される。曾長は死者の出た時期を考え、儀礼をおこなうときを知らせる。ふつうパンノキの実が豊富な、七〜八月ころにおこなわれる例が多い。この儀礼には、オトイモが使用されるので、女たちはタロイモ耕作に励む。通常、タロイモ耕作は、一人の女性単位でおこなわれるが、この機会には三〜四人の女たちが組になって各自のイモ田を共同で耕す。

フアリツクが実施される日には、女たちは自分が手入れした一枚の田にあるタロイモをすべて掘り起こして、儀礼場となるカヌー庫に運ぶ。一人あたり、五〜六籠にもなる。リネツジ間でどれだけのタロイモを提供できたかを競い合う。カヌー小屋の前に積みあげられたタロイモは、曾長の指示のもとに、男たちによって分配される。老若男女を問わず、島の人びと全員に均等配分され、その数は一人あたり二〇〜三〇個になる。タロイモはすべて分配されず、一部は残しておき、分配後、カヌー庫に集まった人びとに投げ撒かれる。このように、一定期間貯えたタロイモを、一度に分配、消費する儀礼は、一九五一年の葬送儀礼を最後に、キリスト教の受容後実施されなくなつた。フアリツクの語意はあきらかではないが、その目的は、死者を出したりリネツジ成員の「淋しい気持」をなぐさめるためと説明される。この儀礼がおこなわれるのは、曾長リネツジから死者が出たときに限られることから、フアリツクの意味は、

表1 人生儀礼における贈与・交換の単位と対象物

	集団レベル	島 レ ベ ル		
		男 性	女 性	分 配
1 誕生儀礼	Ego←F, MF 生のタロイモ (パンノキの実)	魚	料理された タロイモ (パンノキの実)	魚
2 初潮儀礼	Ego←F, MF 腰布 料理されたタロイモ (パンノキの実)			
3 航海術修得儀礼	Ego←F, MF 腰布	魚 若いココヤシ	料理された タロイモ 腰布	料理された タロイモと 魚
4 婚姻儀礼	Ego←SP 料理されたタロイモ 魚			
5 葬送儀礼	見舞い	Ego←SP, F, BC, S 料理されたタロイモ (パンノキの実) ココヤシ タバコ	ココヤシ	料理された タロイモ、 パンノキの実 ないしタバコ (男性のみ)
	埋葬	Ego←SP, F, BC, S 腰布		料理された タロイモ パンノキの実 ないしタバコ (成人のみ)
	弔あげ		若いココヤシ	料理された タロイモないし パンノキの実
	追悼			生のタロイモ 生のタロイモ

注1) Egoは、当事者、Fは子、MFはハハの子、SPは配偶者のリネツジをそれぞれ示し、BCはキョウダイの子どものリネツジ、Sは男性成員の婚出したリネツジを指示する。
2) ←は贈与のおこなわれる方向を示す。

社会的に優位な地位にあるものの死を、島社会全体で弔うことにあるともいえる。これまでで、病気の見舞いから葬送儀礼の諸過程で実施される贈与・交換の実態を略述してきた。それらの機会におこなわれる贈与は、リネツジ単位のものから島レベルにおよぶものまでである。たとえば死者の出たリネツジへの贈与においては、死者の父や配偶者のリネツジからの贈りものとならんで、そのリネツジから婚出した男性成員の子どもたち（アファクル）が大きな役割をはたしている。そして贈与の対象となるものは、ココヤシ、タバコ、タロイモを中心とする食べもの、それに腰布である。ここでも、男性がココヤシとタバコ、女性がタロイモと腰布という贈与物の対立がみられる。また死者は、一〇〇枚もの腰布で包まれて埋葬

され、その腰布が島の女たちから贈られている点も興味深い現象である。

さらに、埋葬後におこなわれる男性からのココヤシの贈与と女性からの食べものの贈りものおよびそれらの島の人びとへの再分配という慣行は、サタワル社会の贈与・交換の性格を把握するうえで、重要な手がかりになってくる。

以上でみたように、本節では人生儀礼の機会になされる贈与・交換の内容を、贈与対象物、贈与者と受贈者との関係、贈与・交換に関与する男性と女性との役割などに焦点をしばって述べてきた(表1参照)。しかし、贈与・交換の性格および象徴的意味については、問題点の指摘にとどめた。それらの問題点は、第三節において検討することにする。

三 集団間の贈与・交換

人生儀礼の諸過程でおこなわれる、母系親族集団(リネツジ)間のココヤシ、タロイモ、腰布などの贈与慣行については前節でも述べておいた。しかし、ここでは贈与者と受贈者との関係および贈与物に関する記述にとどめ、それらの性格や意味については言及しなかった。本節ではサタワルの人びとの贈与・交換にたいする考えかたが如実に反映されている二つの事例をとりあげ、集団間での贈与・交換の意味を考察することにした。事例の一つは、宗教的事などの機会に二集団間で実施される食べものの贈与と返礼であり、二つめは、子どもの誕生後になされる土地および樹木の贈与についてである。

現在、サタワル社会では、イースターやクリスマスのキリスト教の祭日、国際連合の祝日などに、各リネツジで大量の料理をつくって親族関係者に贈る習慣がある。それらのために、男たちは無人島や暗礁に出かけて多くの魚介類をとり、島の人びとに分配する。女たちは、リネツジごとにタロイモないしパンノキの実を収穫し、石蒸し用の炉で

たくさんの料理をつくる。料理ができると彼女たちは、婚出したりネツジ成員(男性)のもとへ、一皿の食べものを届ける。これはクツテール(Kuttele)「男の」食べものを探す」とよばれる。その意味は、婚出した男たちが自分のリネツジの土地でとれた食べものを望むから、彼らにそれを贈るといふことである。

島の人びとの説明によると、男たちは自分の生まれたりネツジの「監督者」として、彼らの母や姉妹を見守るから、婚出後も、その土地で集められた食料を口にすることを期待しているとのことである。そして彼らがときどき自分の集団を訪れ、食事をするのは、集団のことを頭から離さない男として尊敬される行為とみなされている。そのような行事のほかにも、リネツジで大きな食べものをつくったときには、かならず婚出した男性へ食べものを届けなければならぬ。その贈りものをしないことは、女たちが男性キョウダイのリネツジへ立ち寄り拒否する行為とみなされる。

また植物性の食べものにかぎらず、女たちが飼育しているブタを殺したときや、リネツジの男たちが多くの魚を捕獲したときにも、それらの一部を婚出した男たちに贈与することが義務づけられている。この贈りものは、ニンニヤップ(Ninnyapp)「肉を共有する」とよばれる。このニンニヤップに供される魚は、リネツジの未婚男性やリネツジへ婚出した男たちによつてとられたものである。その魚を婚出した男たちに贈与することの意味については、島の人びとはつぎのように述べている。婚出した男たちは、妻のリネツジのパンノキやココヤシでカヌーや漁具をつくる。それらの樹木は妻の集団の「財」であり、妻の男性キョウダイの監督下にあるから、彼らに食べものをあげなければならぬ。つまりこの贈与は、ある集団の所有物を利用してあるものを獲得した場合、利用者がその実質的所有者や監督者と獲得物を共有するという考えに基づいている。したがって前者は、後者にその一部を贈与する義務をおうことになるのである。クツテールおよびニンニヤップの贈与にたいする返礼は、義務づけられておらず、そのとき何かものがあればお返しをする程度である。これらを集団レベルで見ると、婚姻を契機として、婿をとった集団は、婿を与え

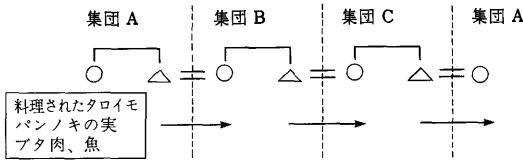
た集団から食べものや肉類を一方的に受けとることになる。すなわちそれらの慣行は、集団での一般交換「レヴィーストロース 一九七七、エケ 一九八〇：六八―七三」とみなすことができよう。

つぎに、集団間での土地の贈与の事例をみることにしよう。婚出した男は、まず自分の身体に塗るコプラの油をとるために、一、二本のコヤシの木を自分のリネツジから分与される。そして妻に子どもがで、二、三年たつと、タロイモ田、ココヤシ林およびパンノキが、夫の集団から妻の集団に贈与される。現在、それらの平均的規模は、三〇坪のイモ田、五〇本のコヤシ、一、二本のパンノキである。この贈与は一般に、ニツファン(nitfang)「贈りもの」とよばれる。その目的は、「婚出した男の立場を強くする」ためとか、「子どもに父のリネツジのことを忘れさせない」ためとかいわれる「須藤 一九八四」。

ここで注目されるのは、それらの贈与物が男の集団からその子どもたちに贈られる点である。つまり、子どもたちは成長してから、それらを自分(母)の集団の指示をうけたり、了解をうることなく処分できるからである。その贈与に対して、子どもたちは父の集団でのカヌーの建造や家屋の建築のさいには、労働力および物資の援助をしなければならぬ。また前節でみたように、父の集団に病人がでた場合には、ココヤシや食べものを届ける義務をおわされる。もし、それらの義務をはたさない、ないしは父の集団の期待にそわないときには、タロイモ田を没収されることになる。

このニツファンの慣行は、贈与にたいしお返しが義務づけられている点で、前述の食べものや肉類の贈与とは性格を異にする。ニツファンの目的が、婚入した男の立場を強くすることにある意味は、「子どもの食料を確保する」ためとも説明されるように、限定された環境での資源の利用、活用とも関連している。集団間での人口増加と食料資源の不均衡性を補うために男を婚出させた集団が、それを受け入れた集団に資源を分与することによって貢献することになる。その貢献度が、婚出後の男性の地位に反映されてくるのである。この島に帰属するリネツジをもたない(土地の

1)一般交換の図式



2)限定交換の図式

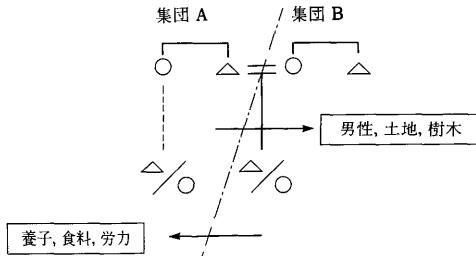


図2 集団間の贈与

ない)他島からの男は、「食べもののない」結婚相手とされ、彼との婚姻を敬遠する傾向があるのもその要因による。島でもっとも重要な贈与財とみなされている土地の分与をうけた子どもたちは、それへのお返しをすることが当然のこととされている。それが「父のリネツジのことを忘れない」という形で表現されるのである。具体的には、土地を分与してくれた集団への労働力の提供、食料の贈与によって返済されるのであるが、そのような観念と関連して、その集団が拒否することができない。その理由は、父の集団、とりわけ父の母や姉妹のもとへ養子としてゆかなければならない。父の集団からの養子の要求にたいし、母の集団は拒否することができない。その理由は、父親が彼の母や姉妹の面倒をみ、土地の責任をもつ存在であるのに、

婚出したから不可能になる。そのかわりとして、子どもが養子にゆくとすることである。つまり、父親が自分の集団における役割をその子どもが代替する形態が養取慣行ということになる。

子どもが父の存在にとつてかわるという養取慣行は、長期的にみれば、二集団間で世代をちがえて、人の「交換」をおこなっていることになる。すなわち、二集団において二世代間での限定交換「レヴィイストロース 一九七七、エケ 一九八〇・六八―七三」を実行しているとみることもできよう。そして土地および樹木の贈与も、一方では資源の流出をもたらすが、他方では二集団間に強固な社会関係を生成させ、それに基づき給付と反対給付の維持を長期的に保証することにな

る。

本節でとりあげた集団間での食べものと土地および樹木の贈与は、いずれも姻族関係にある集団間で実施される。そして贈与の性格は、一般交換と限定交換という性格の相違があるものの、集団レベルで把握するなら、均衡のとれた互酬性の原理に基づいていることがあきらかである(図2参照)。

四 贈与・交換の象徴性

サワル社会の人生儀礼において、贈与・交換の対象となるものは、魚、タロイモ、ココヤシ、パンノキの実、腰布、装飾品およびタバコである。そして集団間では、料理されたもの、肉類と土地および樹木である。それらの贈与・交換財は、人びとのカテゴリによると、モゴ(mwongo)「食べもの」、ピシャック(pishakk)「品物」、ファヌー(fanu)「土地」に分類される。モゴのカテゴリには、魚、タロイモ、ココヤシおよびパンノキの実が含まれる。ピシャックには、腰布、装飾品、タバコ、ファヌーには、タロイモ田、ココヤシ林やパンノキのある土地がそれぞれ該当する。三つのカテゴリのなかで、それらの贈与・交換財は、男性によつて採取、獲得ないし管理されるものと、女性によつて生産、製作ないし管理されるものとの対立がみられる。男性のものとはみなされるのは、魚、ココヤシ、パンノキの実および樹木のある土地(ブノク pwenek)、装飾品、タバコである。女性ものはタロイモおよびタロイモ田(ポーン pwen)「料理されたもの」、腰布である。それらの生産、獲得、および管理の主体が性によつて類別されているので、ここでは前者を「男性財」、後者を「女性財」とよぶことにする(表2参照)。この男性財と女性財との対立は、本的には労働の分業と関連している。つまり男性と女性との性的分業に基づいてつくりだされた産物が、交換財としての意味をもつのである。

表2 贈与・交換における男性財と女性財の対立

カテゴリー	男性財	女性財
食べもの (モゴ)	魚 ココヤシの実 パンノキの実	タロイモ
品物 (ビシャック)	タバコ 装飾品	腰布
土地 (ファヌー)	ココヤシ林、 パンノキのある土地 (ブノク)	タロイモ田 (ポーン)

注1 貝製首飾りやべつ甲製腰布帯などの装飾品は女性の使用物であるが、男性によって製作ないし入手されるので、男性財のカテゴリーに含む。

本節では、男性財と女性財との対立が、食物、品物、土地の三カテゴリーの領域において、どのような象徴的意味を指示しているのかという点を中心に、サタワル社会の贈与・交換の性格を明らかにしてみたい。まず、食物のカテゴリーに分類される魚、ココヤシとパンノキの実、タロイモをとりあげることにしよう。漁撈活動、ココヤシとパンノキの手入れおよびそれらの実の採取は、男性の責任となっており、タロイモの栽培、収穫は女性の仕事とされている。サタワル社会では、それらの生業(生産)にかかわる労働が、男女の肉体的差異という要因だけでなく、伝統的宗教観念と結びついている。つまり男女それぞれの仕事には、多くの禁忌がともなっているのである。それらの禁忌事項を遵守しない場合には、超自然的存在(ヤニュー yanyu)によって危害がおよぼされると信じられている[石森 一

九八五]。

タロイモの栽培は、女性の仕事とみなされ、男性にとつて禁忌となっており、礁湖外での漁撈は男性の活動で、女性にはきつく禁じられている。人びとの考えによると、タロイモの豊穰をつかさどるイモ田のカミは、海において、とくに魚のにおいのする存在(男性)を忌み嫌うからだといわれる。たとえ女性であっても、夫などの持ちものに触れたり魚の骨を踏んだだけでも、浄めの儀礼を終えたあとでないとタロイモ田へ踏み入ることができない。そのため、女性は早朝に田へ行くときは、家の内外で女の空間を^(注8)通らなければならぬ。男性がタロイモ田へ入ったり、女性がそれらの禁忌を犯した場合には、タロイモが枯れてしまうと信じられている。逆に、男性が特定の海域で漁をする場合には、前夜、女性と寝てはならず、カヌー小屋で泊らなければならぬ。そして出漁前および漁撈活動中に、女性の料理したタロイモや

パンノキの実を口にしてはならない。このような禁忌は、海のカミが、女性の血および性器のにおいや女性によつて料理された食べもののおいを忌み嫌うからだと説明される「秋道 一九八一・二七」。もしそのような禁止事項を守らない場合には、海のカミが魚をかくし、一匹の魚もとれないようにするといわれる。不漁が続くときには、それらの禁を犯した人を探し、忌みおとしの儀礼をもよおさなければならぬ。

このような、タロイモの栽培（女性）と漁撈活動（男性）との対立、つまり海と島での生業活動の対立は、島のなかでの労働においても顕著である。それは、タロイモ田とココヤシ林およびパンノキの管理における男性と女性の対立である。ココヤシやパンノキの実の採取は、女性の禁忌事項とされている。その理由は、腰布を身につけた女性が男性より空間的に高いところに位置することは、祖霊が許さないからだと説明される。すなわちこの禁忌は、異性間、とくに異性のキョウダイ間において、女性が男性より彼女の頭を低くしなければならぬという忌避行動に基づいている「須藤 一九八一」。それを犯した場合には懲罰として、祖霊がリネツジ成員に病氣や死などの危害をくわえると信じられている。このように島内の資源利用に関しても、タロイモ田・湿地―女性、ココヤシ、パンノキ・乾燥地―男性という対立が、宗教的観念と結びついているのである。

以上でみてきた海と島、島内での乾燥地と湿地における生業活動の男性と女性との対立は、それらからの生産物の贈与・交換においても、男性財と女性財との対立という形で反映される。たとえば人生儀礼での誕生儀礼や航海術修得儀礼にみられる、魚―男性とタロイモ―女性、葬送儀礼でのココヤシ―男性とタロイモ―女性といった例をあげることができる。そして、誕生儀礼では男のとつた魚が女に、当該リネツジからのタロイモ料理が男に、それぞれ贈られる。また葬送儀礼においても、男のココヤシが女に、女からのタロイモ料理が死者のリネツジの女によつて島の人びとに分配される。このような人生儀礼の贈与・交換で注目されるのは、島のすべての男女が関与し、男性財と女性財とがかならずセットとして登場する点である。そして男性財と女性財が、当事者への贈与財という形態をとるが、

島レベルでみるなら、終局的には分配の過程をへて、男女間で交換されることである。

ここで、人生儀礼の過程で顕在化する男性財と女性財との組み合わせ、それらの男女での交換の意味について考察してみよう。

サタワル社会では、男が特定の海域に出漁して多くの魚をとってきたときに、女からの料理が届かなかつたり、その量が十分でなかつたりすると、男たちは女の不手際を責める。逆に不漁が続き、島の女に魚がまわらない場合には、女たちは男たちの漁における腕の悪さを歌にして揶揄する。とくに儀礼や祭宴のために禁漁区が解放された場合、男の漁獲量の多寡が問題になる。獲物と生産物とをめぐるとのこのような男女間での評価は、日常生活においてもみられる。夫が魚やココヤシをとってこない日が続くと、妻は夫のために食べものをつくらないことで対抗する。夫が魚とりやココヤシの手入れをしないことは、「怠け者」とみなされる。それに対し、妻が食事の用意をしないということは、夫の行為への非難の表現である。逆に、妻がタロイモ田の耕作や料理づくりを怠ると、夫や子どもに「よその炉の食べものを探させる」ことを意味し、「恥ずかしい」行為とみなされる。そして夫婦間での、それらの生産活動への拒否は、離婚の示威行動へとつながる。

サタワル社会における男女間の生産活動へのかかわりあいおよび考えかたを考慮すると、男性財と女性財は、男性と女性との存在そのものを象徴していることがうかがえる。つまり島レベルから家族レベルにいたるまで、男性と女性とがそれぞれの生産物および獲得物を交換することによって社会生活を維持しているのである。生産活動における男女の活動は、宗教的観念と結びついて、男性が漁撈およびココヤシ、パンノキの栽培、女性がタロイモ耕作と規定されている。この男女の分業にかかわる禁忌は、象徴的には、男女がそれぞれの分野でより多くの獲物と収穫物を獲得するのに役立っている。このことは、男女間の交換の局面で、「競い合い」の様相が顕著にみられることから明らかである。したがって、サタワル社会における男性財と女性財との交換は、交換対象物の生産性を高めることが意図

されているとみなせよう。そして贈与・交換の象徴的意味は、資源の活用および活性化の強化にあると解釈できる。

つぎに、品物のカテゴリーに含まれる腰布の贈与財としての意味を考察することにしよう。腰布が人生儀礼で贈与される機会は、初潮儀礼、航海術修得儀礼と葬送儀礼である。初潮儀礼においては、「一人前の女」を象徴するものとして、また葬送儀礼のときには、死者を「包む」ものとして使用される。航海術修得儀礼では、師匠への「献納物」として使われる。そこでの腰布は、師匠からの知識の伝授および資格の授与に対する謝礼として贈与される。これは、男が女の織った腰布によって「一人前の航海者」になれることを意味している。つまり島の男として基本的条件である航海術の修得に、男性財でなく、女性財の腰布が不可欠な贈与財として役立つのである。

腰布は、他島との交易、交換活動においても重要である。航海者は「腰布さえ手にしていれば、どんなものでもうることができるといわれる。たとえば、島でつくられないウコンの粉末、貝製首飾り、べつ甲製腰帯などは、腰布との交換によって入手できる。航海者(男)が、他島へ航海してどれほど多くのピシヤックを持ち帰るかは、島および彼のリネツジの女たちの関心のまところである。このように、腰布は、社会や集団の必需品を島外から獲得するための貴重な「財」となっている。そして交易においては、女性が交換の対象物を製作し、男性が交換活動に従事するという男女間での役割の分担が明確になる。死者を包むものとしての腰布の意味について、人びとはつぎのように述べている。腰布でくるまれない死にかたは「恥ずかしい」ことで、その霊は、人びとに危害をあたえるヤニューになる。たとえば、カヌーでの漂流死などの場合である。つまり、祖霊として集団の人びとを庇護する超自然的存在になるには、腰布で包まれて弔われることが基本的条件とみなされている。

以上のことから、人生儀礼での腰布の贈与は、一つには男女とも子どもの段階から大人のそれ(一人前の女および航海者)への移行期、二つには生者から死者(祖霊)への移行期におこなわれていることが明らかになった。そして初潮儀礼は、女性が一人前の女として生産活動および出産の役割をになうことを意味しており、航海術修得儀礼は、男性

が航海者として島外から物資を入手する責任をおうことをあらわしている。葬送儀礼においては、死者が祖霊となつて人びとを守護することの願いがこめられている。それらの性格を考慮にいと、人生儀礼における腰布の贈与の象徴的意味は、初潮儀礼では女性の豊穰性と多産性とに、航海術修得儀礼では男性の外世界からの富の獲得にあるといふことができる。また、葬送儀礼でのそれは、祖霊の人びとにたいする恵みのほどこしにあることが指摘される。

最後に土地のカテゴリーに含まれる贈与対象物の意味についてふれることにしよう。土地の贈与は、姻族関係にある母系出自集団間でおこなわれる。それは、男性財（ココヤシやパンノキのある土地）と女性財（タロイモ田）とが一組になつてゐる。それらの土地は、ある集団からその集団の男性成員が婚出した集団へと贈与される。前節で言及したように、二集団間での土地の贈与とそれにたいする返済の性格は互酬的である。つまり土地を贈与された集団の子どもたちは、土地を贈与した彼らの父の集団にたいし、生涯にわたつて物資と労力によるお返し義務をおうからである。このことは、母系社会において、父の集団とその子の集団（異なるリネッジ間）の結びつきが、島でもつとも重要な資源である土地を媒介にして保たれていることを示している。贈与された土地の存在こそが、婚姻を契機に結ばれた二集団間の紐帯を確認し、維持・強化する象徴として機能していることになる。

五 おわりに

本稿では、サタワル社会において伝統的な人生儀礼および母系出自集団間でくりひろげられる贈与・交換の事例をとりあげ、魚、ココヤシ、タロイモ料理などの食べもの、腰布、タバコなどの品物やココヤシ林、パンノキ、タロイモ田などの土地をやりとりする贈答慣行の性格を考察してきた。筆者はそれらの贈与・交換の場面に顕在化する男性と女性との役割の分化、男性財と女性財との対立・結合といった側面に焦点をしばり、象徴論的視点からの分析をと

おして贈与・交換財の意味を明らかにすることにとめた。ここでそれらのまとめをおこない、サタワル社会の贈与・交換の特質を指摘しておきたい。

まず、人生儀礼において贈与・交換財としてやりとりされるのは、食べものと品物のカテゴリーに含まれる物資であり、それらはつぎのような性格をもっている。第一は、誕生、航海術修得、葬送の諸儀礼過程での贈与・交換が、当該集団と姻族、親族関係にある集団とのあいだでなされるだけでなく、島全体のレベルへと発展する点である。それらの機会には、貯えられてきた島の食糧資源が一度に大量に消費され、男性財と女性財とがかならず対をなして登場し、島の男女間で相互に交換される。男性財と女性財は、それぞれ男女の労働の分業に基づいて生産されたものである。この分業は宗教的観念と結びつき、男の仕事と女のそれとが厳格に分離されており、男が女の仕事、女が男のそれをすることはタブーとなっている。時に、贈与・交換の場で、男女間でそれぞれの生産物の多寡をめぐって競い合いの様相を呈することがある。それらの要因から、人生儀礼にみられる男女間での生産物、すなわち男性財と女性財との交換の意味は、島の資源の活用と生産性の促進を象徴的に表現していると解釈できる。

第二は、初潮儀礼、航海術修得儀礼および埋葬儀礼に、女性財である腰布が貴重な贈与対象物になっていることである。女性が腰布を身につけるのは、一人前の女の象徴である。それらの儀礼は、それぞれ少女から女、男の子から一人前の航海者、生者から死者(祖霊)への移行を社会的にあらわしている。したがって初潮儀礼の腰布の贈与は、象徴的には豊穰性および多産性を意味しており、航海術修得儀礼のそれは、男性が女性のつくったもので力をえ、外界からの富の獲得を象徴しているとみなすことができる。また、死体を包むための腰布の贈与の象徴的意味は、死者の霊が善い祖霊となって人びとに恵みをもたらす存在へと転換することにある。

つぎに、贈与・交換の単位を集団レベルでおさえると、ある集団とそこから男性が婚出した集団との関係が、重要な意味をもっていることを指摘できる。年中行事の機会における前者から後者への食べものの贈与、人生儀礼の過程

における両者間での食べものや品物のやりとりをみれば明らかである。この二集団間の贈与・交換には、二つの異なった側面がある。第一は、女性が婚出した彼女の男性キョウダイへ食べものを贈与することを義務づけられていることである。それは彼が生涯にわたって、彼の母系集団の監督者の地位にあることに帰因する。つまり、男性が婚出後も彼の母系出自集団の政治・社会的統率者でかつ資源の統轄者であるという地位・役割にたいする彼の集団の女性キョウダイからの贈与である。したがって、この贈与は母系社会（出自集団）における男性の女性にたいする地位の優位性を象徴していることになる。

第二は、男性の集団が彼の子どもに土地を贈与する点である。子どもからみれば父の母系出自集団から、ココヤシ、パンノキおよびそれらの生えている土地とタロイモ田を贈られるのである。この贈与された土地の存在が、贈与した集団と贈与された集団との関係を確認するしとなる。そして人生儀礼の機会に、子どもたちは父の集団へ土地の贈与にたいする反対給付として食べものや品物を贈ることが義務づけられる。このように、母系社会における集団とその父の母系出自集団との紐帯は、土地の贈与によつて象徴的に保持されるのである。

最後に、サタワル社会の伝統的な贈与・交換が、食料資源の利用における規制と解除と関連している点をあげるることができる。大量の資源の蓄積と消費（再分配）は、島の政治的指導者（酋長）の指示によつて実施されるからである。つまり食料資源が限定され、余剰生産物を期待できない島社会においては、贈与・交換の基本的意味が、飽食と節食という対照的局面を人為的につくりだすことによつて、象徴的に、社会的統合をもたらすことにあるとの解釈がなりたつた。

注

(注1) レヴィリストロースは、「親族の基本構造」でモースの「贈与論」を高く評価して、互酬性の基本的問題について論じている。彼は、互

酬性を人間社会に普遍的に認められる精神構造と位置づけ、「自己と他者の対立を統合させるもつとも直接的形式」と規定した「レヴィイロストロース一九七七・二八一―二八二」。また、サーリンズは未開社会にみられる贈与・交換の性格を分析し、互酬性の原理にもとづいて三つのタイプに分類している [Sahlins 1965: 139-236]。一つは「一般互酬」で公式化されない互酬、親族間のやりとりや気前のよさなど、弱者や貧者に恵みをもたらす性格を特徴とする。三つ目は、「均衡互酬」で、二者間での釣り合いのとれた贈与・交換を指す。二つ目は、「消極的互酬」で、直切り、ごまかし、盗みなどを含み、物質的利益を目ざす行為を指示する。

(注2) 互酬性の一般的定義は、「自分が受けた贈物、サービス行為または損害にたいして何らかの形でお返しをすること」[J・ファン・パール 一九八〇・七]である。この広義の意味内容を含む互酬性の概念を社会現象に適用する場合に、研究者の視点は、かならずしも一様ではない。マリノウスキーは、互酬性の原理こそがメラネシア社会の人間関係を律する基本的な規則とみなしている [マリノウスキー 一九七六・四二―四三]が、同地域を調査したトゥルウンヴァルトは、互酬性の觀念が友好的援助や物物交換の場面で顕在化して、人間関係すべてに見出されないことを主張している [HURNWALD 1934-35: 122, 125]。そのような概念の不明確さを念頭において、ファース (Firth R) は、ポリネシア社会の贈与・交換の把握のためには、互酬性の原理を贈られたものに同等のお返しをする均衡のとれた贈答・交換に限定して適用すべきだと提案している [FIRTH 1967: 318, 346]。そのような混乱を避けるためには、互酬性や互酬的原理によって人間の行動や態度を記述するさいに、規則、理念、願望、期待、慣習などのどの局面を説明するかを明確にする必要がある、というマッコーマック (Macormack, G.) の指摘は重要である [MACORMACK 1976: 99]。

(注3) 各母系出自集団の成員は、相互に系譜関係を迎えることができるので、この集団は、リネツジとみなすことができる。八つのリネツジは、現在一五の下位集団 (サブ・リネツジ) に分節化している。そしてサブ・リネツジが基本的な土地保有集団となっている。この居住集団は、母系拡大家族とよぶが、本稿ではリネツジの用語を使用する。サブ・リネツジの成員によって構成される居住集団 (家族) の規模は、最大が二世帯七二人、最小が二世帯一〇人である。その成員は妻方居住様式をとるため、二―三世代間の女性リネツジ成員、彼女らの夫と子ども、未婚の男性成員および養子から構成される。

(注4) 現在サタワル島には、八軒のカヌー小屋がある。それらは基本的には、リネツジごとの所有とされているが、実際にはカヌー小屋に隣接する居住集団によって利用されている。カヌー小屋は、カヌー収納庫として使われるほかに、男性の集会所、独身男性の寝所、島外からの客の宿舎、病人の収容所などにも利用される。詳細は、須藤 [一九七九] を参照されたい。

(注5) サタワルの人びとがキリスト教に集団改宗したのは、一九五〇年代のことである。それ以降、伝統的宗教体系やそれに基づく儀礼が放棄ないし廃止されてしまった [石森 一九七九・二六〇]。そのため、本稿でとりあつかう人生儀礼の多くの事例は、それを経験した長老の人びとから聞きとったものである。

(注6) ヤシ酒は、ココヤシの新芽から採取される液汁を自然発酵させたものである。航海術の伝授に若者から贈られるヤシ酒は、「月の下の酒」とよばれる。その意味は、月明りのもとでヤシ酒をくみかわしながら、長老の航海者が若者に知識の伝授をおこなうことである。

(注7) サタワルの人びとの死生観によると人間は、死後、「靈魂」と「肉体」とに分離し、「肉体」は墓地にとどまるが、「靈魂」は五日目の朝に「あの世」へ旅立ち、そこで「祖霊」になると考えられている。したがって、フィラオラオは、靈魂を送る儀礼である。現在でも、この儀礼は実施されている。またプアイニエもおこなわれているが、祖霊を祀った小祀への供物の献上や直会は、キリスト教の受容後、放棄された。小祀は、「カミの家」ともよばれ、海岸に立てられた小さな建物であった。呪者が守護霊をよび寄せて、病気の治療儀礼などをおこなう場所であった(「土方 一九四〇・三三」)。

(注8) サタワルの家屋は、側面に入口がもうけられる。入口のある反対側の側面および廂の下の部分は、女の空間とされている。そこには、身につけてない腰布が掛けられ、男性の立ち入りが禁止される。その背後の中庭も女性の空間とされ、食事をしたり、男性が踏みこむことが禁じられている。

参考文献

- 秋道智彌 一九八一「へ悪い魚」とへ良い魚——サタワル島における民族魚類学——『国立民族学博物館研究報告』六巻一号、六六一—三三頁。
 石森秀三 一九七九「サタワル島の数占い——その基本体系について——」『国立民族学博物館研究報告』四巻二号、一五七—二五〇頁。
 一九八五 『危機のコスモロジー——ミクロネシアの神々と人間——』福武書店。
 牛島 巖 一九七六「ミクロネシア・ヤップ島の「貨幣」」『歴史・人類』(筑波大学・人類学系紀要)二号、八四—一二五頁。
 エケ、P (小川浩一訳) 一九八〇『社会的交換理論』新泉社。
 須藤健一 一九七九「カヌーをめぐる社会関係——ミクロネシア・サタワル島の社会人類学的調査報告——」『国立民族学博物館研究報告』四巻二号、二五一—二八四頁。
 一九八一「母系社会における忌避行動——ミクロネシア・サタワル社会の親族体系(一)——」『国立民族学博物館研究報告』五巻四号、一〇〇八—一〇四六頁。
 一九八四 「サンゴ礁の島における土地保有と資源利用の体系」『国立民族学博物館研究報告』九巻二号、一九七—三四八頁。
 一九八六 「母系社会における子どもの養育」『社会人類学の諸問題』(馬淵東一先生古稀記念論文編集委員会編)第一書房、一三九—一五九頁。
 土方久功 一九四〇『ヤップ離島・サテワヌ島の神と神事』南洋群島文化協会。

- 一九四三「サタワル島における葬儀ならびに死及び葬儀に関連する呪儀・禁忌その他」『民族学研究』七巻二号、一二二—一三四頁。
- J・ファン・バール(田中真砂子・中川敏訳)一九八〇『互酬性と女性の地位』弘文堂。
- マリノウスキー, B (寺田和夫・増田義郎訳)一九六七。『西太平洋の遠洋航海者』『世界の名著』五九巻(泉靖一編)、中央公論社、五九—三二頁。
- 青山道夫(訳)一九六七『未開社会における犯罪と償罰』新泉社。
- メア, L (土橋文子訳)一九七九『婚姻—夫とは何か—人類学的考察—』法政大学出版。
- モース, M (有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳)一九七三『贈与論—大古の社会における交換の諸形態と契機—』『社会学と人類学』二、一九—三九頁。
- トビヤ・ヌメロース, C (馬淵東一・田島節夫監訳)一九七〇『親族の基本構造』(上)『番町書房』。
- COMAROFF, J. L. 1980 *The Meaning of Marriage Payments*. London: Academic Press.
- FIRTH, R. 1967 *Primitive Polynesian Economy*. London: Routledge & Kegan Paul.
- NAGASHIMA, N. 1981 Is the Wife-Giver Superior?: the Affinal Relationship among the Ireso of Kenya with Special Reference to Ivan Karp's Propositions. In N. Nagashima(ed.), *Themes in Sociocultural Ideas and Behaviour among the Six Ethnic Groups of Kenya*. Hitotsubashi University, pp. 43-68.
- NASON, J. 1970 *Clan and Copra: Modernization on Eial Island, Eastern Caroline Islands*. Ph. D. dissertation, University of Washington.
- RUBEL P. G. and A. ROSMAN 1978 *Your Own Pigs You May Not Eat: Comparative Study of New Guinea Societies*. Chicago: The University of Chicago Press.
- SAHLINS, M. D. 1965 On the Sociology of Primitive Exchange. In M. Barton(ed.), *The Relevance of Models for Social Anthropology*. A. S. A. Monographs No. 1. London: Tavistock Publications, pp. 139-236.
- SCHWIMMER, E. 1973 *Exchange in the Social Structure of the Orokaiva: Traditional and Emergent Ideologies in the Northern District of Papua*. New York: St. Martin's Press.
- STRATHERN, A. M. 1972 *Women in between, Female Roles in a Male World: Mount Hagen, New Guinea*. London: Seminar Press.
- THURNWALD, R. 1934-35 Pigs Currency in Buin. *Oceania* 5, pp. 119-141.
- WEINER, A. 1977 *Women of Value, Men of Renown: New Perspectives in Trobriand Exchange*. Queensland: University of Queensland

Press.

——1980 *Reproduction : a Replacement for Reciprocity. American Ethnologist*, 7(1), pp. 71-85.